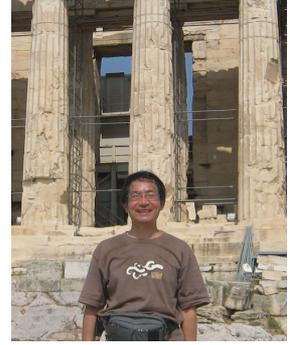


ギリシア哲学における幸福

名古屋大学大学院文学研究科 教授
金山弥平 (かなやま やすひら)



Profile — 金山弥平

1986年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)。京都大学文学部助手、名古屋大学文学部助教授などを経て、2000年から現職。専門は古代ギリシア哲学。主な著訳書は、『ピュロン主義哲学の概要』『学者たちへの論駁(全3巻)』(いずれも共訳、京都大学学術出版会)、『ヘレニズム哲学』(単訳、京都大学学術出版会)、『古代の世界 現代の省察：ギリシアおよび中国の科学・文化への哲学的視座』(共訳、岩波書店)など。

死すべきもの

古代ギリシア人にとって、神と人間は、①労苦を免れた不死なる存在か、それとも悲しみを抱いて生きる死すべき存在か、また②オリュンポス山の頂から全世界を俯瞰する鳥の目と、横から詳細に眺める虫の目の両方を駆使できるか、それとも視界を遮られつつ人生の道を歩んでいくしかないか、という点で決定的に異なっていた(ホメロス『イリアス』第2歌484以下;金山,2012)。『イリアス』第22歌に描かれた、別れを惜しむヘクトルとその家族の姿と、彼がアキレウスに追われて逃げまわるのを、オリンピック競技を楽しむかのようにひいきの選手の振る舞いに一喜一憂しつつ、上と横からの両方の視点で見物する憂いなき神々の姿は、明確なコントラストをなしている。

「ピロソピアー」(ピロ(愛し求める)ソピアー(知恵を)＝哲学)関係の語の使用が認められる現存する最古のテキストは、ヘロドトス『歴史』1.30であるが、その中でリュディア王クロイソスは、王宮を訪ねたソロンに向かって次のように語る——「そなたの知恵と、そなたが知を求めて(動詞の現在分詞「ピロソペオン」)広く世界を見物して廻ってこられた漫遊の噂はこの国にも届いている。そこでお尋ねしたいのだが、そなたは誰かこの世でいちばん幸せな人に遭われたことがあるか?」王の期待に反してソロンが称えるのは、見事な死に方をした者のみであったため、不満に思ったクロイソスは、

彼自身の幸福(エウダイモニー)には何の価値もないのかと重ねて尋ねる。それに対してソロンは、人間の生涯はすべてこれ偶然であり、最期を迎えるまでは、誰にせよ幸福な人と呼ぶのは差し控えねばならないと答えるのである(1.32)。実際、その後クロイソスは大きな不幸に見舞われる。「最期」を意味するギリシア語「テロス」は、「完成」「目的」をも意味した。人間は生まれてきた以上、必ずや終わりを迎える。それゆえにまた、ギリシアの哲学者たちは、視界の限られた人生の道を歩む中で、死に向かわざるをえない人生の道を、善き生を全うする完成の道として歩む方策を模索したのである。

Well-being

ソクラテスはプラトン『エウテュデモス』278E-282Dで、「プロトレプティコス・ロゴス」(哲学の勧め)と呼ばれる議論を展開している。これは、われわれの魂を「(しかるべき方向へ)向け変え(トレペイン)、進める(プロ)議論(ロゴス)」である——人間は誰でも幸福を欲求する。しかし幸福のためには何が必要なのか? 富か、健康か、美か、名誉か……? しかしそれらが益となるためには正しく用いられなければならない。正しい使用を可能にするのは知である。また知恵なくしては、それらはむしろ害となる。それゆえ幸福になるためには、知恵(ソピアー)を求め(ピロ)(＝哲学し)なければならない。

この議論では「幸福」に相当する語として、ヘロドトス『歴史』にも認められる「エウ（よき）ダイモニア（神霊の祝福）」関係の語も用いられているが、議論導入部では「エウ（よく・うまく）・プラッティン（行なう）」（名詞では「エウプラギアー」）が使用されている。「行なう」が含まれているという事実は、ソクラテスの求める幸福がたんなる幸福感ではないことを示唆する。近年セリグマンは *Flourish* (2011) において、positive emotion や engagement といった主観的状态だけでは well-being の説明に十分でないとして、relationship, meaning, accomplishment などの客観的要素をも考慮に入れることを提唱している（頭文字をとって PERMA）。古代ギリシア人たちも同様に、主観的な幸福感と、客観的にも幸福とみなしうる状態の両方を含む well-being を求めたのである。

しかし何が本当に「よく・うまく行なうこと」であるのか？ 民主主義のもとアテナイ市民が直接政治に参加できる状況においては、それはまず政治的成功であった。ソフィストがよく・うまく行為するための徳を教えると称して、そのじつ弁論術を教えたのもそのためである。しかし、たんなる政治的成功を目標に据えるとき、ほかならぬ王クロイソスが最も幸福であるともみなされるであろう。プラトン『ゴルギアス』493A-494B においてソクラテスは、ペルシア大王を理想とし弱肉強食思想を唱えるカリクレスに対して、魂を甕^{かめ}にたとえ、いくらでも好きなだけ満たすことができるが孔が開いているためすぐに空になる甕と、貴重な液体を満たし、そのまま保持できる甕とどちらを選ぶか、と問いかける。孔の開いた甕の生は、液体を満たしつづけることができたとしても、所詮、快樂の踏み車を踏み、一向に前へ進まない生き方でしかないであろう。ギリシア哲学者たちは、哲学による理性的考察を通して、孔の開いていない甕となる道を探ったのである。

理性と情動

しかし、理性による幸福追求については、近年、脳神経科学、心理学の方面から疑問が投げ

かけられている（A. R. ダマシオ, J. ハイトなど）。「理性は情動の奴隷である」（『人間本性論』2.3.3）と主張するヒュームへの評価と裏腹に、とくに魂の不死証明を行なうプラトン『パイドン』は槍玉にあげられることが多い。しかし魂の不死は主張するものの、プラトンは、魂が身体的情動の影響なしに自由に判断でき、それを意のままにコントロールできるとは考えなかった。むしろ魂の一部をなす放縦な馬が欲求に駆られて猛進するときには逆らいえないことを認めたくえで、気概あるもう一頭の馬の協力を得て劣った馬を訓練する方策を模索したのである（『パイドロス』253D-254E；金山, in press）。

じつはハイト (Haidt, 2006) 自身、欲求（彼の譬えでは象）を再訓練する方法があることを認めている。彼が挙げる有効な方法は、瞑想と認知療法と SSRI である。しかし、瞑想 — 「マインドフルな注意」と言ってもいいであろう — と認知療法によって優れたものとなるのは、象（あるいは馬）だけなのか？ プラトンであれば馬と馭者の両方と答えるであろう。馬好きのギリシア人にとって、馬をうまく操るには、馬の資質・訓練だけでなく、馭者の側でも、馬の心的・身体的状態へのマインドフルな注意と、強情な馬でも長期的視野に立って我慢強く馴らしていく知恵が必要とされることは自明であっただろう。プラトンは知のあり方を説明するためにさまざまな技術（テクネー）に言及するが、馬の状態の expert intuition と理性の働きの両方を含む「ヒッピーケー」（馬の技術）もその一つであった。それをプラトンは「ヌース」とも「ロゴス」とも呼んでいる。いずれも「理性」と訳しうるが、しかし形式論理に従う reasoning を主たる役目とする reason とは大きく異なるものである。



写真 馭者と2頭の馬のアンポラ (B.C.640～620頃)

ソクラテスは、善き生についての人並み外れた expert intuition とマインドフルな注意力を具えていた。悪しき生に通じかねない行為に対して警鐘を鳴らすダイモーンの合図（『パイドロス』242B-C 等）は、優れた消防士に危険を察知させる intuition とよく似ている。また、対話篇登場人物の表情を肉眼で見ることはできないが、プラトンの文学的力量は、馬の表情を読み取ることできたトムキンス、また弟子のエクマンさながらに、ソクラテスが対話相手だけでなく周囲で問答を聴いている人たちの表情も的確に把握している姿を生き生きと描き出す（たとえば『国家』336B-E）。また『パイドン』における魂の不死証明は、ソクラテスの死を前にして動揺する友人たちへの認知療法の試みとみなしうる。しかし『パイドン』では、三つの不死証明によって一時高められたポジティブな感情が、次の瞬間にはシミアスとケベスの反論によって打ち砕かれる。その際にもソクラテスは、友人たちの否定的ムードを細やかに察し、シミアスらに対する再反論、さらに善原因説や、最後の魂不死証明を通して、シミアスらをも含む全員のポジティブな感情を高めるべく、さらなる認知療法に携わるのである（『パイドン』88C-107B；金山, in press）。

旺盛な好奇心ゆえに哲学を発展させ、競争好きゆえにオリンピック発祥の地となり、また平等と自由を求めて民主制をも生みだしたギリシア人は、新たな考えを競合的關係のうちで説得することに大きな価値を見出した。ここから説得の手段としての弁論術、および論理の明確化に役立つ形式論理が発展する。このうち形式論理的な reasoning は、確かに intuition への働きかけにおいてはさほど有効ではないかもしれない。しかし、説得の中には intuition に働きかけうるものもある（Haidt, 2001 の social intuitive model）。『パイドン』の魂の不死証明も、形式論理に従いつつ、論理的思考だけでは受け入れがたい諸前提を含んでいる。それらは最終的には、宇宙的な善を原因とする枠組みのもとで確信されるべきものであろう。また『パイドン』でもそうだが、プラトンはしばしば議論に

よる説得の後、物語やメタファーを用いて説得をいっそう効果あるものにしようとするのである。

ハイト（Haidt, 2001）はまた、「稀に」という断りつきで、理性的考察によって① intuition とそれに基づく判断を吟味し覆す可能性、②別の新たな intuition を喚起する可能性にも触れている。無知の自覚に基づいて自他の吟味を続けるソクラテスの説得は、ソフィストたちの説得——欲望と情動に訴えて、intuition とそれに基づく判断を引き起こして済ませる説得——とは決定的に異なり、情動の支配から逃れる道を備える可能性も具えていたであろう（金山, in press）。

冒頭で述べたように、神々はオリュンポスの山頂から地上を全体的に見渡すことができる。プラトンの哲学的探求は、intuition による判断に対して slow thinking をもってチャレンジし（Kahneman, 2011）、新たな道を模索する中で、真実の世界を構成するアイデア同士のネットワークの、より広い認知地図を獲得していく行程であったとみなしうる。同時にそれは、神に近づく道でもあった。プラトンは『テアイテトス』の神まねびに関する議論において（173C-177C）、哲学者は、個人的に不正を受けたかどうかというネガティブ感情を引き起こす問題からは離れ、はるかな高みから人間とは何か、幸福・不幸とは何かを考えると述べている。この考察を通して人は、幸福と関わる諸概念が連絡しあって大路小路を形作る広大なロードマップを獲得し、人生のより深い meaning に接近しようとプラトンは考えていたであろう。

アタラクシア（無動揺、心の平静）

アレクサンドロス大王の支配のもと個々のポリスの政治力が衰えると、人々は外面的成功よりも個人的・内面的幸福に意を注ぐようになる。実際、先に挙げた「幸福」を示す二つのギリシア語のうち、「エウブラギア」関係の語はヘレニズム哲学でほとんど使われなくなった。この点で興味深いのが、若きアレクサンドロスの家庭教師をも務めたアリストテレス『政

治学』1325a16ff.の言葉である。彼はエウダイモニアとはエウプラギアであり、幸福実現のためには「行為」が必要であるとしますが、しかし政治的生は自由な人間の生ではないとして、国の支配から遠ざかろうとする立場にも理解を示す。そして最終的に、エウダイモニアは行為であるとしたうえで、その行為は他者に対する場合しか成り立たないわけではなく、自己完結的な観想や思惟においてこそ本来の意味での行為が成り立つとするのである。帝国の時代は幸福内面化の傾向を生む。ヘレニズム哲学の目標となった「アタラクシア」(無(ア)動揺(タラクシア)＝ネガティブ感情からの自由)もこの全体的流れの中に位置づけられる。

しかしネガティブ感情からの脱却の道は、PERMAが示すようにさまざまでありうる。ヘレニズム哲学のストア派、エピクロス派、懐疑派はそれぞれに独自の戦略を示した。アレクサンドロスの東征はギリシア人たちの認知地図を広げたことであろう(金山, 2011)。犬儒派のシノペのディオゲネスが語る「世界市民(コスモポリテース)」の立場(ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』6.63)と、それを受け継ぐストア派のコスモポリタニズム、および自分に帰属する固有(オイケイオス)なものを単なる動物的自己保存のレベルから広い人間関係と宇宙(コスモス)にまで広げ、自然(＝神、運命、理法、摂理)と一致した生を生きようとするストア派のオイケイオシス(親近化)の思想(7.85-6)は、ポジティブなrelationshipとmeaningを高める戦略でありえた。またエピクロス派の快樂論(苦痛のない状態こそが最大の快樂である)は、快樂の踏み車を免れたpositive emotionに通じる道を示し、彼らの共同生活の場(庭園、ケーポス)は、女性・奴隷を含めたpositive relationshipの機会を提供した。また快樂論に基づく神学(至福なる神は人間のことで煩いはいらない、だから神を恐れる必要はない)と、死の恐れから解放する原子論(死はわれわれにとって何ものでもない。なぜなら、死によって原子へと解体したものは感覚をもたないから)は、エピクロス派にとつ

て、認知的再評価による恐怖に対する治療法であった(10.139。ストア派とエピクロス派についてはLong, 1974を参照)。認知的再評価はまた、ピュロン主義の懐疑派が用いた対置——あらゆる現われと思考に、それと抵触する現われと思考を対立させる方法——およびそこから判断保留を通して無動揺に至る戦略にも認められる(セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』1.8-12, 19-35。Annas & Barnes, 1985も参照)。また「現われ」に従って生きる懐疑派の戦略は、マインドフルネスを想起させる。懐疑派の祖であり、「無動揺」を哲学の目標に据えたエリスのピュロンは、アレクサンドロス大王に随行してインドに行き、同地において裸のソフィスト(行者)と交わったと伝えられている。どの程度の影響であったかはともかく、彼はインドにおいて瞑想に触れる機会をもったのかもしれない。

文 献

- Annas, J. & Barnes, J. (1985) *The modes of scepticism*. Cambridge University Press. [J. アナス, J. バーンズ/藤澤令夫(監修)・金山弥平(訳)(1990)『懐疑主義の方式』岩波書店]
- Haidt, J. (2001) The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment, *Psychological Review*, 108, 814-83.
- Haidt, J. (2006) *The happiness hypothesis*. Basic Books. [J. ハイト/藤澤隆史・藤澤玲子(訳)(2011)『しあわせ仮説』新曜社]
- Kahneman, D. (2011) *Thinking fast and slow*. Farrar, Straus and Giroux.
- 金山弥平(2011)「よく行なうこと(eupragia)」から「無動揺(ataraxia)」へ: 幸福(eudaimonia)と、認知的再評価、フロー、マインドフルネス。『名古屋大学哲学論集』10, 1-32.
- 金山弥平(2012) 神の知と蠟の書き板。日本西洋古典学会 <http://clsoc.jp/agora/essay/2012/120709.html>.
- 金山弥平(in press) 幸福とは何か?: 古代ギリシア哲学、とくにソクラテス、プラトンの視点から。『中部哲学会年報』45.
- Long, A. A. (1974) *Hellenistic philosophy*. Duckworth. [A. A. ロング/金山弥平(訳)(2003)『ヘレニズム哲学』京都大学学術出版会]
- Seligman, M. E. P. (2011) *Flourish*. Free Press.